

観光産業と日本復興 その果たすべき役割

東洋大学国際地域学部 国際観光学科 准教授 島川 崇

観光のチカラ体系

2001年から日本は観光立国にかじを切り、「これからの日本は観光が救う」といろいろな場面で言われるようになりました。しかし、その観光のチカラについて体系立てた話あまり出ていませんので、ここで普通のまちを観光地にすることのメリットを改めて体系立ててお話ししたいと思います。これはロンドンのメトロポリタン大学のメソッドを日本流にアレンジしたものです。

まずはじめに、直接的経済効果です。観光客を受け入れれば経済が発展します。まさにこれから日本は少子化で人口が減りますから、そのような状況でだれしもが受け入れやすい観光客は重要な役割を果たします。

そして、観光の経済効果は観光事業者、宿泊施設、運輸業者だけが享受するわけではありません。食事をすれば農業も盛んになりますし、お土産を買えば工業も盛んになる。その経済効果が他産業にもリンクしていきます。これを観光のリンケージ効果と表現します。このように観光産業はすそ野が広く、いろいろな産業に効果がリンクするといえます。

もうひとつ、雇用創出効果があげられます。昨今、就職は本当に厳しい状況です。以前は工場を誘致すると求人数が増えましたが、今の工場はオートメーション化されて全然人がいなくなりました。しかし、観光は人が介在する産業です。シーツ1つにしても、まだまだロボットが敷けるわけではありません。人が介在する産業であるゆえ、雇用を創出することができるのです。

そして、女性や若年層、高齢者などバラエティに富んだ雇用ができます。工業で創出した雇用は、体が動く人 若年で力のある男子が注目されました。しかし観光ではお年寄りでも働く場があります。その地域に根差したお年寄りは、自分の知識をとつとつと話す素晴らしいガイドになれるでしょう。また、白川郷のある民宿の若女将は、以前外資系企業でバリバリ仕事をしていましたが、故郷が世界遺産に登録されたものの英語を話す人がいないため地元に戻って大活躍しています。もし観光がなければ彼女は白川

郷に戻ってこなかったでしょう。このように、バラエティに富んだおもしろい雇用が生まれてくるということです。

さらに、起業家精神（アントレプレナーシップ）が高まります。はじめは、直接的経済効果と雇用創出効果と並べていうほどのものではないと思いましたが、全国を回ってみて、新たに何かをしようという地域で、よそ者や若者をつぶさないところではいいものが生まれていることに気づきました。新しいことをやろうとする気持ちをつぶそうとする既得権益をもっている人たちが強いところは、地域づくりがうまくいきません。

その起業家精神を高めるために、一番いいのは観光です。また、観光は小資本で参入可能ですから、定年後に退職金でペンションをつくる、そんな参入のしかたもあります。

それから間接的利益、これはインフラ整備などをさします。日本はインフラ整備が充実しているといわれるかもしれませんが、たとえば電柱の地中化があります。ロンドンで見た東京のガイドブックの表紙の写真は、東京タワーや浅草雷門ではなく、なんと小さな路地の電柱だったのです。こんな小さな路地に電柱があるのか、と驚きの目をもってみられたのでしょうか。電柱を地中化すると、空がぱっと広がってきれいになります。まだ急には進まないかもしれませんが、電線地中化はまず観光地から始まります。白川郷は、本当に周回遅れの農山村だったわけですが、これだけの観光客が来るようになり、荻町集落では電柱地中化が完了しました。今後も、観光客を受け入れる町から先に電柱を地中化することになると思います。

そして、一番声を大にしていいたいのがアイデンティティのアピールということです。これが、まさに観光地化することのメリットです。地域の魅力は地元の人だけではなかなかわかりません。しかし外の目を入れることによって、その地域のよさが逆に再発見されることもよくあります。その意味で、観光地化することの一番のメリットは、自分たちのアイデンティティがどこにあるのかわかることです。そして、それを外に対して効果的にアピールできるのは観光の特権だと思います。

観光地化はメリットだけではない

観光地化のメリットについてお話してきましたが、反対にデメリットもあります。それらはバラバラにあるのではなく、さきの5つのメリットにそれぞれ対応して存在しています。

直接的経済効果や観光のリンケージ効果で、確かにお金は入ってきますが、本当に利益が地元還元されているか、という問題もあります。実際、地元が生産して地元へ恩恵が行くお土産はどれくらいあるのでしょうか。観光地でよくあるお饅頭は、表紙を変えて中身が一緒だったりします。今一番日本で売れているお土産はご当地キティらしいですが、あれは売れば売れるほど静岡の会社がもうかるそうです。地元にお金が落ちていない構造になっているわけです。また、修学旅行中なぜか木刀を買ったりしましたよね(笑)。全国いろいろな場所で売っていますが、あの木刀の多くは会津で生産しているそうです。このように、お土産を買っても地元の産業や経済に貢献しない場合も多くあります。せっかくお金が入ってきてもそれがどんどん漏れていきます。これは観光のリンケージ効果と比較して、観光のリーケージ効果とされています。

まだ日本はよいのですが、開発途上国の観光地では外資系の企業がどっぴり入り、利益をすべて本国にもって行く構図があります。タイでは9割が抜けるといいます。ですから利益が本当に地元に残っているのかを確認していかなければいけません。

それから、雇用創出効果のところでは、季節労働、短時間労働しか生まれにくいこともあるということです。マネージャー職は外部から呼び、地元の人は雇うけれども単純労働ばかり任せるといった構図もあります。

特に開発途上国に顕著な話だろうと思っていましたが、先日ペニンシュラの方と話をしたら、まさに同じで、マネージャーは全部外国から呼び、日本人はホスピタリティあふれるマインドでサービスの最前線を受け持ってくださいといわれているのだそうです。

次に、起業家精神が高まっても、大企業や大資本に負けてしまうことも多くあります。また、犯罪の増加も問題です。観光客が犯罪者になることもありますし、観光客目当ての犯罪もふえてきます。

アイデンティティのアピールもいいことばかりではありません。マーケットが観光プロモーションの力をもつと、マーケット主導になります。すると、デスティネーション側の思いとは全然違うことがアピールされ、イメージと現実のギャップが生まれることもしばしばみられます。

そして、もう1つ別に存在しているのが環境負荷です。観光客を受け入れれば必ず環境負荷がかかります。意識の高い人も来ますが、意識の低い人も必ず来るということで

す。ですから、エコツーリズムを振興したから環境に優しい人が来て、相乗効果でよくなるのだと考えていたらいつの間にか環境が破壊されているということがなくはありません。環境には必ずフットプリント（足跡）がつきますから、負荷がかかるということ認識しておかなければならないのです。

結局、観光振興は打ち出の小槌ではなく、もろ刃の剣なのです。正のインパクトと同時に負のインパクトもあるのだということを強くここで申し上げておきます。

サステイナブルツーリズムの考え方

そこで、これら負のインパクトを最小限にするために、持続可能な観光＝サステイナブルツーリズムという考え方が必要になってきます。そして、サステイナブルツーリズムを実現する上での障害となるのは「ブーム」です。航空会社、鉄道会社、旅行会社もキャンペーンは1つの手法ですが、これがもしかしたらブームを巻き起こしているのかもしれない。ブームの怖いところは、過ぎ去ったらスタート時よりも下がるということがあるということなのです。ブームを巻き起こす手法は、サステイナブルとは反するものですから、小さいところから少しずつ、乱高下しないようにじわじわと取り組むことが必要で。

そのために、大事なポイントが2つあります。1つは、商業的に成立させることです。小泉首相時代から観光が政策課題になりました。それ自体はとてもよいことですが、1つ悪い面があります。それは、政策の重要さ＝予算の多さなので、あまり使い道がなくとも予算がどんどんつく現象がおこります。予算は大体3年間くらいで打ち切られますが、それに乗っかって（モニターツアーなどに）取り組んでしまうと、打ち切られたときにブームが過ぎ去り、予算がついた時よりも観光地が疲弊します。予算頼みで、商業的に成立していないからです。

もう1つは、観光客、地域住民、観光事業者の三方一両得でなければならないということです。ですから「商業的に成立する」とこと、「三方一両得」というのは密接にかかわっています。観光事業者がお客様からいただいたお金でサービスを提供するのが正常な姿です。お客様からいただくずに、モニターツアーを作ってタダで来てもらって、タダで帰す。これはいつまでも続きません。ですから、観光事業者も商業的に成立していなければなりません。結局のところ、観光客と地域住民だけではなく観光事業者もちゃ

んと観光で回っていくようにしていかなければいけないということが大事になってくるわけです。

東日本大震災と被災地観光

さて、このようなことが言われている中、東日本大震災が起きました。それまでの平時は、観光の効果や力が声高に言われていましたが、震災が起こってみんな途端に黙ってしまいました。観光に行くのは被災地に失礼だとか、自粛しようという動きになったのはご存知の通りです。

2ヵ月後くらいに宮城県の村井知事が観光庁長官を訪れ、ぜひ宮城県や東北に来てほしい、今東北に来てくれることが私たちへの支援につながるのだと訴え、初めて東北に観光を振興してよいのだ、という発想になりました。しかし、最初そこから出てきたツアーは、会津や石巻など、無傷だったところの従来型の観光でした。

いっぽうで、この少し前から、NPOやNGOがボランティアツアーを立ち上げ、有志を募っていました。旅行会社がそのようなツアーを始めたのはもっと後、3ヵ月後くらいだったかと思います。

ところで、地域住民は被災地観光に否定的ではありませんでした。私がこういう意識に至ったのは、私の東北時代の友人から、石巻にとにかく来て見てほしいと連絡をしてきたことに始まります。実際に石巻の状況を見て、とにかくこういう状況なのだということをおもひに伝えてほしいと言われました。それから私は被災地を観光で応援していきこうと動き始めたわけですが、そして、気仙沼の大島や三陸鉄道の復興といった動きを現在進めているところです。

被災地の人々は、物見遊山で見にくるということを我々が危惧しているほど嫌がってはいません。被災地の人々が今最も恐れているのは「忘却と無関心」です。阪神淡路大震災を知っている人から聞くと、1年は大体覚えてくれていたが、1年半たったときからどんどん意識が離れていったそうです。それが、私が被災地観光を自らプロデュースしている理由です。

被災地観光参加者の心境

被災地観光に参加した方のアンケートをとると、おもしろい結果が出ました。参加の動機では、60代の方はおおむね自分の目で確かめたいという理由が多く、いっぽうで2

0代の多くは、被災地のために役に立ちたいとか、同じ日本人として、いてもたってもいられないという理由が多かったのです。

私もゼミ生を連れていきました。連れて行った前後でどのように気持ちが変わったかを調べてみました。「無関心にならないよう被災地の情報を積極的に得る」という人は、被災地観光前は18.8%だったのですが、行った後は50%になりました。「被災地を支援するイベントに参加したい」という人は6.3%しかいませんでしたが、行った後は43.8%になりました。「多くの人に被災地の現状を語ろうと思う」人は6.3%しかいませんでしたが、行った後は68.8%になりました。「ボランティアをしたい」と思っていたのは18.8%でしたが、行った後は48.8%となりました。

保存か否か

ところで、釜石湾の遊覧船が民宿の上に乗っている映像はご存知でしょう。いまは、住民の「忌まわしい震災を思い出したくないから早く撤去してほしい」という希望を受け、釜石市長の命令で撤去されました。まちづくりは住民イニシアチブですから、撤去の決定は間違っていないと思います。余震による二次災害も懸念されていました。

しかし、住民の希望が優先されていたら、実は広島原爆ドームは現存していません。当時は住民も原爆のことを思い出したくないと思っていたわけです。しかも、アメリカからは撤去の大きな圧力がかかっていました。

当時を知る方に実際に伺ってみました。原爆ドーム＝産業奨励館は、ステンドグラスやパイプオルガンがあり、ボールルームダンスが行われるなど、ハイカラで一步進んだ、広島富の象徴であり、市民が誇りに思う建物だったそうです。しかし被爆後、自分たちの誇りだった建物をこんな無残な姿で残しておくのはしのびない、早く撤去すべきだという声がいへん多かったそうです。ですが、当時県にも市にもお金はなく、道路や病院を直すほうが優先されました。

これが保存に大きく動き出したのは、被爆して白血病で亡くなったある高校生の遺書がきっかけです。そこには「この痛々しい産業奨励館だけが原爆のおそろしさを後世にうたえかけるだろう」と書かれていました。それをみた友達や仲間によって、この惨禍が二度と起こらないように保存すべきである、と運動が始まったわけです。

世界を見渡すと

では、このように被災の惨禍を保存することは難しいのでしょうか。世界で、自然災害など、予期せぬ災害の跡を残している事例がどこにあるのか、いま世界じゅうを探しています。

今年の2月と3月、タイのパンガー県にある「ナムケム村津波記念公園」に行ってきました。津波で内陸のほうまで流されてきた漁船をモニュメントにして、公園が整備されています。

犠牲者の七、八割はドイツ人でした。ナムケム村はプーケットよりもずっと安い観光地、ビーチがあり、長期滞在しても結構安く済みます。そこに来ていたのが犠牲になったドイツ人でした。犠牲者の親族が働きかけ、1人1人の写真や生前のことが書かれたパネルが作られ、壁面に埋め込まれています。また、亡くなった地元の人々のパネルもあります。ある遺族の方は「これで妹の生きた証が永久に保存される。ありがたい」と語っていました。

もう1つ、これもパンガー県の「ルアトー813 津波記念公園博物館」の建設予定地にも行きました。813という巡視艇がゴム畑の2キロくらい奥に打ち上げられ、そのままになっています。ここでは、プミポン国王の娘のウボンラット王女のご子息が犠牲になられたそうです。そのご子息を守るために海で護衛していた巡視艇が813で、ウボンラット王女は息子を弔うために、ここに津波記念公園をつくり、1つのモニュメントにして整備していこうとしているわけです。完成は来年だそうです。すでに被災者の方が、被災の写真のDVDや、Tシャツやハンドクラフトを販売するお土産屋を始めていました。

もう1つ、台中で地震がありましたね。そこでは崩壊した中学校をそのまま残して、921地震教育園区というものが作られました。地震でぼろぼろに崩れた校舎に大きな天井をかぶせ、雨風の影響を受けないように保存されています。それ以外にも、地震の状況が再現され、地震の構造が学べたり地震が体験できる博物館ができています。国家が運営しているということです。ここでは、崩れた光復国民中学が今どのような中学校になったかというパネルが展示されていて、子供たちに、痛ましい過去を乗り越え夢をもって勉学に励めるような新しい校舎のコンセプトが書かれてあります。地震の展示もありますが、地震が起こる前の光復中学の生徒たちの絵や校歌、制服なども全部残されてい

ます。

海外の事例から学ぶこと

このように、海外の事例では、保存は国家主導だということです。地方自治体でやるとなると、やはり住民の現在の生の声が一番耳に入ります。保存より早く仮設住宅建設を、となればそちらを優先することにもなるでしょう。そして住民の傷は数年では癒えません。スマトラ沖地震の被災者に聞くと、今でも悪夢のように思い出すとか、亡くした子供の写真いつも見ていると悲しいのでタンスの一番奥底に置いてあるとか、そんな話をしていました。ですから、そういう状況下で保存の決断を自治体に託すのは酷だなという気がします。やはり国家主導で（予算措置も含めて）残すという決断をすべきです。

そして、スマトラ沖地震の被災地には津波の石碑があります。しかし地震から7年経ち、だれも見向きもしなくなりました。やはり観光資源にするためには、石碑ではだめなのです。ここでしか見られないものでなければならぬのです。そして今までの事例を見るに、地域住民の理解を得るためには惨禍をそのまま残すだけではなく、犠牲者の名前を残したり、被災前の平穏な日常生活の思い出を残したり、未来への希望につながる展示内容にするということが必要なのだと思います。

長崎の小学校

そういう意味で、長崎でも事例を見つけました。長崎で保存されているものには一本鳥居などいろいろありますが、そこまで多くはありませんでした。爆心地に近い浦上天主堂はぼろぼろに壊された建物がそのまま残っていたのですが、アメリカの強い意向を受け、長崎市長と教区長のトップダウンで撤去されてしまいました。ですから長崎には原爆ドームのようなシンボリックなものはありません。

しかし、少し離れた高台に城山小学校という学校がありました。当時としては珍しい鉄筋校舎で、円窓のあるとてもモダンな、浦上地区の人たちの誇りだった校舎でした。これが原爆にやられ、一部だけ残った校舎が保存されていましたが、老朽化のため取り壊し、新校舎を建てようという話になったのです。すると、なんと小学生から保存を求める強い声が上がったのです。その結果、平和祈念館として残りました。

この城山小学校では、被爆後、授業を再開してから、毎月9日を平和祈念の日して、

研究発表をしたり、平和を考える日にしていたのです。8月9日だけでなく、毎月毎月そういうことをやっていたことで、保存するという発想が出てきたのでしょうか。この平和祈念館には、今までの平和祈念の勉強の成果も展示されています。

トップダウンとボトムアップ

今までみてきた事例は長崎のもの以外、すべてトップダウンで残してきたものです。ですが、トップダウンの事例ばかりみても、日本にはおそらくなかなか通用しないと思ったので、これからはボトムアップの事例を探していこうと思っています。たしかに、例えば戦争のような「共通の敵」がある事例ならばボトムアップもできるでしょう。しかしそういう事例をいくら見ても被災地の参考にはならないと思いました。ですからこの長崎のような事例を世界でもっと探していかなければいけないと思っています。

観光に携わる人こそ力を信じて

ところで、私の友人に戦場カメラマンがいます。戦場カメラマンは、今起こっている戦争の状況をファインダーに写し、写真にして、時間と空間を超えて人に伝える仕事です。しかし、目の前で子供が死にゆくのに写真だけ撮って手を差し伸べずに行くな、おまえの仕事は何で1人を救わないのだ、と強烈な批判を浴びることもしばしばだそうです。しかし、その批判を物ともせず、次に行ってまた写真を撮り、また次に行って写真を撮るのです。それは戦場カメラマンでしか時間を超えてその画を伝えることができないからです。

ひるがえって、我々観光に携わる人間が「観光なんて後ろめたい」などと言っていたら、私は情けないと思います。戦場カメラマンがそれだけ自分の仕事に誇りをもっているのと同じく、私たちもこういう有事のときこそ観光の力を信じて、堂々と観光地を訪れて、観光地とともに平和で幸せな生活を追求できるような産業であってほしいと思います。それはたぶん我々の世代がやるべきだと思いますし、この考え方は、一番最初に申し上げた三方一両得、観光客と地域住民と観光事業者、その3者がハッピーになればいけないという発想です。

今回の震災で思ったのは、観光事業者よりも観光産業以外の人のほうが観光の力を知っていたということです。NPOが立ち上がって有志を募り、ベンチャーファンドが被災地の企業を支援する。ただ支援をするだけでなく、自分が支援した企業がどうな

ったか実際に見に行こうという活動をしているベンチャーもあるようです。実際に行って、自分が出資した企業の人と一緒に語り合い、ありがとうと一緒に手を取りあって成果を喜び、お互いを結びつけていく。そして再訪するわけです。あえてそういうところをみせていく　それこそ観光の力ではないのかなと私は思いました。

「つながる」「かかわる」時代というのはもう既に来ています。学生と接していて、彼らのほうが「つながる」「かかわる」ということを身にしみてわかっているような気がしています。いっぽうでそれをわかっていない世代もあります。「自分が」「自分にとって」という発想がどんどん今の世の中をおかしくしたのだと思います。だれかのために1人1人がちょっとでも我慢して、だれかのために自分の力を使う　そういう動きができることこそ、これからの日本を救っていくのではないかと思います。

観光の原点を思い出そう

そしてもう1つ、団体旅行が旅をつまらなくした。だから個人旅行にシフトしたという話がよく出ます。しかし、私は団体旅行が旅をつまらなくした以上に、個人旅行が旅をつまらなくしたのではないかとも思っています。

というのは、例えば団体旅行ではいやがおうにもバスの中でガイドの説明があったと思います。本を読まなくてもガイドがちゃんと説明をして、その前提で見るとができます。しかし個人旅行になって、もちろん「地球の歩き方」にも書いてありますけれど、訪れる地域のことをちゃんと読まずに、いかに安く食えるか、泊まれるかしか考えず、結果貧乏自慢をしている。そんな旅が長続きするとは私は思えません。本当の旅の醍醐味はその地域をみるだけではなく、その背景にあるものごとを深く知ることこそではありませんか。それが個人旅行でできなくなっているのではないかという気がしてなりません。

ですから、被災地観光ではがれきの前でピースするのはいかなものか、といった話がよく出ます。しかし、がれきの前でピースするのはフリーで来た人です。旅行会社が介在してガイドの説明を受けたら、ピースなんてできなくなります。連れて行った学生たちも今どきの子ですが、話を聞いてぼろぼろ涙を流している子もいました。

私はこの被災地観光を、ただ被災地支援の取り組みということではなく、旅の力をもう一回我々が再認識するいい機会だと思っています。旅の本当の醍醐味は、その背景ま

で知ること、伝えることだと思います。すべてを理解して、心の交流をすることだったと思います。今、旅行に携わっている皆さん、ぜひその旅行の原点を思い出してください。人の交流、心の交流をぜひつくっていただきたいと思います。ですから、被災地観光をぜひ商品ラインナップに含めてほしいと思っています。

今後私が一番かかわりたいのは福島第一原発の問題です。福島第一原発は冷温停止後、たぶん更地になるでしょう。もしかしたら終末処理場になるかもしれません。何ごともなかったようなきれいな公園に整備するかもしれません。しかし私はそれに真っ向から対決したい。あの無残な姿をそのまま残して、世界の人々に核の恐ろしさ、人知を超えた原発の暴走の結果を末代まで伝えていくために、福島第一原発をそのまま残す活動に取り組みたいです。

最後は少し重苦しい話になったかもしれませんが、私は残りの人生はそれに力を注いでいきたいと思っています。ですので、今ここで皆さんには、そういうことを考えている人間がいるのだということをぜひ思っていていただければと思います。本日はご清聴ありがとうございました。